

日本人の心



京都、こころここに

能の心

能楽金剛流宗家

金剛 永謹さん



こんごう・ひさのり シテ方金剛流能楽師。1951年、二世金剛蔵の長男として京都市に生まれる。56年「狸々」で初舞台。98年に金剛流26世宗家を継承。公益財団法人金剛能楽堂財団理事長。国内に限らず海外公演も多い。

幼い頃、「お月様や兎が餅つきをしているよ」と教えられ、月の影の模様を飽かずに眺めた。爽やかな心地よい風が吹くと「極楽の余り風」などと昔の人は風雅な、温かみのある言葉を使っていたと思う。日本人の研ぎ澄まされた感性は、自然の中で培われてきた。そこにはいつも自然に対する深い畏敬の念と感謝の心が在った。



静かに語りかけて観る人の心を投影する

能は六百年にわたり、様々な時代を乗り越えながら今日まで綿々と続いてきた。長い歴史の中で数え切れない程の人々が能を見つめてきた。喜びや悲しみや、人生というそれぞれの歴史を背負う人々

に、能は静かに語りかけてきた。能は寡黙な演劇といわれるが、時に私は、その中に秘めた、多くの人々の思いを受けとめて包み込むような懐の深さにはっとすることがある。それはつまり、能は観る人のイメージを掻き立て、心を投影するということであらうか。

亡霊が描く孤独の中で到達する究極の精神世界

先日、私の曾祖父である金剛謙之輔の映像が発見された。1912(大正元年)に京都で撮影されたもので、現存最古の能楽の映像がフランスのアルベル・

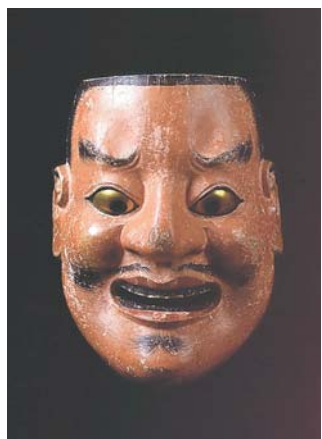
能は、演目ごとにテーマを変えながら、時代を超えた人間の本質的なものを描いているが、その中で多く登場するのが亡霊である。亡霊は、今を生きる私達に人間の情念や生老病死をまざまざと描き、語りかけてくる。この世の中で本当に大切なものは何なのか、生まれてきて死ぬということとは、等々…。これは誰でも避けては通れない永遠のテーマで、人が最終的に孤独の中で到達する究極の精神世界ではないだろうか。

カーン博物館に所蔵されていた。私も初めて謙之輔の舞姿を目にして衝撃に似た感銘を受けた。毅然とした立ち姿や、ほとばしる躍動感、伸びやかな舞姿から溢れ出る生命力が感じられ、私は背中を強く平手で叩かれたような気がした。百年の時を超えて現代に蘇ったことに、われわれに向けて託された強いメッセージを感じずにはいられなかった。

人間本来の感性や生命力を失いつつある

あまりに便利になった世の中で、自然の織り成す四季の移ろいも感じられなくなり、生物として本来持っている人間としての感性や生命力を失いつつあるような気がする。

古典は、概して古くさい過去のものと思われがちだ。しかし、人類の永遠のテーマである「本当のもの」を追求している古典は、いつの時代も瑞々しく、私達の心に深い感動を与えるものである。今回発見された百年前のフィルムは、そういうことをあらためて思い起こさせてくれた。



能は人間の本質的なテーマを描く。本当に大切なものは何か、生まれ死ぬとの意味を問いかける

古典はいつの時代も瑞々しく私達の心に深い感動を与える

日々、息つく暇もなく溢れ出る過剰な情報の中で、目に見えないものに、かきとらわれ、利便性を追い求め、己を見失いかけている私達は、その声に耳を傾け、自分

戦後、日本人は物の豊かさや引き換えに大切なものを忘れてきたのではないだろうか。日本人が忘れつつある価値観が今も生き続ける千年の都・京都から温故知新の知恵を発信する。(毎週日曜日に掲載します)

日本の暦

水始めて潤る (10月3日)

田の水を干し始める候。つまり田の水を抜いて稲穂の刈り入れ準備をする季節で、黄金色に輝く田をスズメよけの鳴子やカカシが見守る。この光景がその時代の風物詩。日本の七十二候の元となった古代中国の七十二候でも、この時候は同じように「水始潤」と呼んでいたといえます。稲作の歴史も感じさせてくれる言葉ですね。さて、お米屋さんの店先に「新米入荷」と大書されるのもそろそろかと。味覚の秋の始まりです。

リレーメッセージ



伝統文化 プロデュース・連代表 濱崎 加奈子さん

小学生のころ、漢詩の一節を暗記させられたが、最近になって、何にも代え難い教えだったと感謝している。

御所西にある江戸中期の儒者皆川淇園の学問所である弘道館址の屋敷を現代の学問所として再生させる活動をしている。全国から門生三千人が集った大事な場所だが、その存在すら忘れられていた。

江戸時代の学問は儒学であった。堅苦しいイメージがあるが、子供もみな論語などの経書を読んだという。ただ、その教育スタイルが「素読」と呼ばれる漢文の音読暗記の学びであったことは意外に知られていない。

声にだして覚えるということは、こぼれに込められた古人の知と美のリズムを体内に刻みこんでいくということである。とりわけ論語ならば同時に君子の教えが身に付き、人間形成に役立つ。一石二鳥であった。そうした身体をおとした学びは江戸時代の人々の教養となり、今の日本の豊かな知識文化をつくったのである。あるいはまた、震災後に話題になった日本人の品性の基礎をなしたといった過言ではないだろう。

忘れられた素読の文化。たまには漢文を声にだして読んでみませんか。

(次回10月9日のリレーメッセージは小説家の松村栄子さんです)

(日本人の忘れものは、京都新聞ホームページ <http://kyoto-np.jp/kd/kyo-np/info/nwc/>で観てください)

ともいき。



今、こうして生きているわたしたちの『いのち』。それははるか昔の祖先から綿々と受け継がれてきた結果です。そして同時に、それは未来の『いのち』へとつながっていく土台となる役割を担っています。家族や友達をはじめ、生きとし生けるたくさんの『いのち』。それぞれに過去から現在、現在から未来へと続く『いのち』のつながりが厳然としてあるのです。ひとりの『いのち』は、ひとりだけの『いのち』ではない。『共生』には、かけがえない『いのち』の大切さが込められているのです。

◎浄土宗二十一世紀男頭宣言
愚者の自覚を 家庭にみ仏の光を 社会に慈しみを 世界に共生を



総本山知恩院 法然上人の御廟

総本山知恩院
元祖法然上人800年大遠忌法要奉修
平成23年10月2日(日)～10月25日(日)
※10月11日(日)には、「東日本大震災物故者追悼法要」を奉修します。詳細は、知恩院ホームページ <http://www.chion-in.or.jp/> をご確認ください。



浄土宗 Jodo Shu Buddhist Organization

法然共生 宗祖法然上人800年大遠忌